

絶滅学問種保護運動

本橋信義
数学系教授

冷戦後の世界を「グローバル資本主義」という妖怪が徘徊している。この妖怪は、市場原理という武器を振りかざして新しい世界秩序を作ろうとしているらしい。政治、経済の分野だけでなく、学問、教育の分野もこの妖怪に侵食されつつある。市場原理が、学問や教育の分野でも声高に叫ばれるようになってきた。市場原理に耐えられない学問は、淘汰されようとしている。説明義務を全うしない学問、存在価値を明示できない学問は生きていけない時代になりつつある。絶滅生物種が話題になるように、絶滅学問種を話題にすべき時代になりつつある。

世間における価値は“お金”であるから、学問の存在価値は、まず、その学問の経済効果ではかられる。当然、応用的学問より基礎的学問にとって厳しい時代になる。基礎的学問の代表ともいえる自然科学にとって厳しい状況である。さらに、その中でも、最も経済効果が期待で

きない数学は、さらに厳しい状況におかれている。

経済効果を無視しても数学は必要である、というある種のコンセンサスが少なくとも科学の世界にはあった。今や、その種のコンセンサスは消滅している。さらに、数学軽視の風潮が初等中等教育の現場で進んでいる。高校生の大部分が理解できないという理由で、高校数学はバラバラに裁断され、分かるところだけ教えればよい、というカリキュラムが実行されてしまった。できないことはやらなくてよいという思想が、数学教育の世界でも巾をきかせている。

当然、学生の数学の力は落ちていく。問題の深刻さによりやく気付きはじめた一部の人間が、数学の学力低下を訴え始めている。しかし、まだまだ、その訴えは大きな声になっていない。実際、声をあげているのは、数学に関係する学者ばかりである。社会全体の反応は未だ冷た

い。数学も市場原理のもとで生き延びなければならない、という現実は何れも変わらない。

数学の世界でも、計算機、統計、あるいは、微分方程式を扱う解析学等の応用的分野は生き延びそうである。しかし、暗号理論で脚光を浴びている代数の一部を除くと、純粋数学は絶滅学問種の第一候補である。その中でも、筆者が専攻する数理論理学（数学基礎論）は最早瀕死の状況かもしれない。かつて、「数理論理学は死滅したか？」というテーマのシンポジウムがあったそうだが、数理論理学者は、計算機の世界に逃げ込む以外に生きていけない状況である。純粋な意味での数理論理学は、既に、絶滅していると断言する専門家もいる。

科学の世界には、経済効果という評価基準の他に、引用件数という別の評価基準が存在する。膨大な数の研究者をかかえた研究分野はいざ知らず、研究者の殆どいない分野では、引用件数は何の意味も持たない。実際、本当に新しい分野、革命的な研究は、同時代の研究者には評価されないのが普通ではないだろうか。だとすると、多くの研究者がたむろして活動している分野は、既に、最盛期を過ぎた学問分野ではないだろうか。そのような分野での引用回数にどれほどの意味

があるのだろうか。

とにかく、数理論理学者には生き難い時代である。若い研究者は、まず、生き延びることを考えてほしい。絶滅してはならない。生き残るために、本性を隠して、世の中で生きていかなければならない。隠れキリシタンのように。そして、世の中が落ち着きを取り戻し、数学や数理論理学といった分野にも活動の場が提供されるようになるまで。

われわれは追い詰められている。しかし、座して死を待つより、積極的に撃って出ることを考えようではないか。その方法の一つとして、絶滅学問種保護運動は有効な方法である。生物における絶滅種保護が、緊急肝要な問題として、世間の認知を受けている。では、なぜ、絶滅生物種の保護が必要なのであるだろうか。絶滅するものは、そのまま絶滅させればよいのではないか、という意見もない訳ではない。この種の意見に対して、われわれ人類も生物の一つであるから、絶滅生物種の存在は、われわれ人類の存在そのものにかかわる警告であるという見解がある。しかし、この見解によると、人類の生存とは全く無関係な場合には、絶滅生物種の保護をする必要がないことになるのではないだろうか。

大事なことは、いろいろな生物種が存

在することである。将来は誰にも分からない。何が役に立ち、何が役に立たないかを知る方法は存在しない。だからこそ、将来の保険として、さまざまな生物種を残す必要があるのではないだろうか。同じ理由で、絶滅学問種の保護も必要なのである。数学、自然科学以外にも、人文科学や社会科学の中には絶滅しかかっている学問種がたくさんあるはずである。まず、保護運動の環を広げることと考えよう。そして、この運動の最終目標として、絶滅学問種用サンクチュアリーとしての新しいタイプの大学を作る、というアイデアはどうであろうか。筑波大学の将来像の一つとして、考慮する価値があると思う。

絶滅学問種保護運動と騒いでも、われわれが動かない限り、何も起こらない。まず、われわれ数学者が世の中に出て行く必要がある。といっても、友人の秋山仁君のように、マスコミの世界に飛び込めというのではない。地道な活動を、身近なところから始めようというのだ。

大学と社会との接点は、学生の入口と出口である。学生の入口とは、もちろん、入学試験である。学類でいえば、前期試験、後期試験、推薦入試、AC入試等の入試が、社会と大学の重要な接点なのである。この接点に関連して、われわれ

れはいままでにさまざまな活動をしてきた。例えば、自然学類数学専攻では、平成5年度から、高校生相手に、体験学習を二日かけて毎年行なっている。第一回目の体験学習の時は、文部省（当時）の後押しもあり、大学本部が世話をしてくれた。マスコミも取上げたせいか、50人の募集に対して200人以上の応募があった。それから8年、多くの大学が体験学習を始めたせいか、応募者は定員を割り込むようになってきている。しかし、体験学習は高校生のためだけにやるのではない。体験学習を通して、講義を担当する教官、アルバイトの学類生、院生も、絶滅学問種としての数学の保護運動に参加しているのである。さらに、高校の先生との交流の機会を持ち、彼らを保護運動に引き込まなければならない。

また、大学の出口に関しては、卒業生を活用すべきであろう。実際、卒業生はわれわれの財産である。優良な財産が多ければ多いほど、その学問種の生き延びる可能性が高まる。

まず、身近なところから絶滅学問種保護運動を始めよう。実際、もう、どこかで、既に始められているのかもしれないが。

（もとはしのぶよし 数理論理学専攻）